

# ヴォルネー『廃墟』と エレディア「 Cholera 神殿にて」

— 一九世紀イスマノアメリカ文学に対するフランス古典主義文学の影響の一例 —

花 方 寿 行

一九世紀前半、スペインから次々と独立を遂げた中南米諸国の知識人達が、ヨーロッパの啓蒙主義思想や、続くロマン主義の作家達から受けた影響については、様々な研究が為されている。その中には、シャトーブリアンやルソーのように、個別に詳細に論じられる作家もいれば、「読まれた作家」として名こそ挙がれど、誰にどのような影響を与えたのか、あまり具体的に論じられない作家もいる。

今回取り上げるヴォルネーは、後者に当たると言っていいたいだろう。エミリオ・カリーヤの古典的な大著『スペイン語圏アメリカにおけるロマン主義』においても、ヴォルネーの名前と、彼がエレディア、サルミエント、アルベルディに影響を与えたという指摘はされているものの、具体的なことは論じられていない<sup>1</sup>。

本論文では、ヴォルネーの主著『廃墟』が、一九世紀初頭のイスマノアメリカ独立期三大詩人の一人とされる、キューバ出身の詩人ホセ・マリーア・エレディアの詩「 Cholera 神殿にて」に与えた影響を、具体的にテキストを比較検討しながら、明らかにしてゆく。

## 一 ヴォルネーと『廃墟』

コンスタンタン＝フランソワ・ド・シャスプフ、ヴォルネー伯爵（一七五七—一八二〇）は、その生没年からも分かるように、啓蒙主義の旧体制から、フランス革命を経て、ナポレオン帝政に至る激動の時代を生きた人物であり、古代

---

<sup>1</sup> Emilio Carilla, *El romanticismo en la América Hispánica*, vol. 1. Madrid: Editorial Gredos, 1975(3<sup>rd</sup> ed. revisado y aumentado), p. 92, 112. およびCarilla, *La literatura de la independencia hispanoamericana*. Buenos Aires: EUDEBA, 1964, p. 112. 参照。なお後者においてカリーヤは「 Cholera 」に、シャトーブリアンの影響も見出している。

史や東方言語の研究者として高く評価され、そのフィールドワークの副産物ともいえる紀行文が、当時広く読まれていた。ヴォルテールやルソー、シャトブリアンとは異なり、現在はあまり読み継がれているとは言えないが、近代的な帝国主義と連動するオリエンタリズム成立に与えた彼の影響の大きさは、エドワード・W・サイードがかの『オリエンタリズム』において、エジプト遠征へと乗り出すナポレオンが、このプロジェクトを立案する上で依拠した作品として、ヴォルネーの『エジプト・シリア紀行』を重視していることから、確認できる<sup>2</sup>。

「オリエント」を帝国主義的に支配するに先立ち、それを可能にする情報と同時に、それを正当化する論拠をも、現にそこにある「オリエント」「オリエンタル」からは切り離して、徹底してブッキッシュな形で提供する、巨大なアーカイヴとしての「オリエンタリズム」が機能し始める、良くも悪くもまさに画期的な局面において、重要な典拠と見なされるようになったヴォルネーの著作は、決してそのオリエンタリズム言説としての機能を抜きにして、単に審美的にイスマノアメリカ作家達に評価され受け入れられたのではない。後に詳しく論ずるように、国や地域、対象とされる集団は異なれど、これらの作家達はいずれもヴォルネーのテキストが自動的に想起させるオリエンタリズムのアーカイヴから力を引き出すことによって、自らを「西洋」、他者を「オリエント」に重ね合わせ、他者の征服・支配をまず言説上で正当化し確定する作業を行っていたのである。

ヴォルネーのイスマノアメリカ作家への影響を論じる上で手がかりとしやすいのは、『エジプト・シリア紀行』と並ぶ代表作の、『廢墟、または諸帝国の変遷に関する考察 *Les Ruines, ou méditation sur les révolutions des empires*』(一七九一)である。この作品は、ヴォルネー自身の中近東旅行と結びつけながら、文明論を展開する形式を取っている。

まず第一章では、シリアのパルミール遺跡を訪れた語り手＝著者が、日没時に廢墟を見下ろす丘に登り、瞑想に耽る。続く第二章で語り手は、様々な文明の栄枯盛衰、世の無常に思いをめぐらせる。そして東方諸文明が栄えたのが異教時代であり、キリスト教やイスラム教支配となってからは沈滞していることに、神の御心は計り知れず、人間はただ運命に弄ばれるばかりだと慨嘆する。第

---

<sup>2</sup> エドワード・W・サイード、『オリエンタリズム』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、一九九三、上巻 一九〇―一九二頁。

三章に入ると、語り手の前に幻影が現れ、その軽率な判断を戒める。理性的に判断すれば、自然が神の創造した時のままで、何の変更もなく機能し続けているのは、明白である。それなのに人間の作った帝国に盛衰があるとすれば、それは人間が自然に反した統治を行っているからであり、神の思し召しのせいにするのは本末転倒だというのだ。

以下、語り手＝著者の求めに応じて、幻影が世界の諸文明の変遷を解説してゆくという形式で、文明論が展開される。数多の文明が滅びていったのは、宗教によって理性が曇らされるなどして、本来為されるべき自然の理に則った統治が行われなかったためである。したがって何より重要なのは、理性的に本来あるべき社会の自然な姿を知り、それに即するように統治を行うことだというのが、最終的な結論である。

さて、『廃墟』の第一章から第三章までの展開をやや詳細に紹介したのは、ここがエレディアをはじめとするイスマノアメリカ作家達に、特にはっきりとした影響を与えたことが確認のできる、重要な部分だからである。以下の本論文では、エレディアへの影響関係を、『廃墟』を適宜引用しながら、行うことにする。

## 二 エレディアと「 Cholula 神殿にて」

本論文で『廃墟』との影響関係を論じるのは、キューバ出身の詩人ホセ・マリア・エレディア（一八〇三―三九）である。一八一〇年、ナポレオン軍のスペイン侵攻をきっかけとして起こったイスマノアメリカの独立運動は、エレディアの比較的短い生涯にも、大きな影を落としている。現在「キューバの」詩人として、その憂国の詩が高く評価されるエレディアだが、自らが帰属する「ネイション」が最初から自明だったわけではない。父ホセ・フランシスコはドミニカ出身で、エレディアの誕生直前にキューバに移ってきた人物であり、エレディア自身も現地の独立派が比較的劣勢であった一八一〇年代後半、同じ行政区域の中にあった現キューバのハバーナとメキシコの大学、両方に通っている。今回取り上げる「 Cholula 神殿にて En el teocalí de Cholula」は、エレディアがメキシコで学んでいた一八二〇年に書かれたものだが、この時のエレディアを「留学生」と見なしては、誤解が生ずるだろう。メキシコがキューバとは異なる「国家」となるのは、翌二一年の独立宣言によってだからだ。

それ故「 Cholula」においては、エレディア自身と重ねられる語り手は、

もう一つの代表作「ナイアガラ」とは異なり、「故郷」キューバと現在滞在中の土地を比較し、望郷の念に浸るというスタンスはとっていない。だがそれでいてこの作品では、メキシコの自然は距離をもって、異国情緒豊かに描かれている。その描写を可能にするのが、ヴォルネー『廃墟』の援用なのである。

なお「 Cholula 神殿にて」は、一八二〇年に初めて発表されたが、一八二五年版『詩集』に収録されるに際して、加筆修正が施された<sup>3</sup>。さらに三二年版『詩集』において、後半部分に改めて大幅な加筆修正が行われた。本論文では、三二年版を底本とするポルーア版を利用して分析を行うが、これはまず現在二〇年版が失われていること、また加筆修正があまり行われていないとされる前半部と、三二年版で加筆修正が行われた後半部、両方に『廃墟』の影響が見られることを確認することによって、エレディアへのヴォルネーの影響が一過性のものではなく、より深いレベルのものであったことが明らかにできるからである。

「 Cholula 神殿にて」は、エレディアがメキシコでの学生時代に、先住民文明の遺跡である Cholula 神殿を訪れた経験に基づくものである。この作品では、まず日没時の平原の風景が、詩人の目を通して描かれる。続いて Cholula 神殿の遺跡で物思いに耽る詩人の姿が提示される。彼は文明の儂さ、栄枯盛衰の理に思いをめぐらせ、往事のアステカ帝国の栄華を思い描く。しかしアステカの人身犠牲を批判し、これが迷信の害についての教訓になることを期待して、詩は結ばれる。

「 Cholula 」が最初に発表された一八二〇年と、現在主として流布している三二年版の間には、メキシコとキューバの状況を大きく揺さぶる様々な出来事が起きていた。比較的独立運動が劣勢であった一八二〇年、本国スペインで保守反動政治を展開していたフェルナンド七世に対する叛乱が相次いだ結果政変が生じ、自由主義的な一八一〇年憲法を支持する政権が誕生すると、そもそも保守派寄りであったメキシコで逆に独立への気運が高まり、一気に独立派によるイグアラ綱領の下での大同団結が成立する。こうした独立運動への動きが急激に活発化する時期をメキシコで過ごしたエレディアは、キューバに帰国後、スペイン体制下に留まる方針をとった現地政府に反抗して、亡命を強いられる。アメリカ合衆国での短期の滞在の後、一八二五年メキシコに戻った彼は、この地で後半生を過ごすことになる。様々な政治変動に巻き込まれつつも、故郷

---

<sup>3</sup> Carilla, *La literatura...*, p. 111. 参照。

キューバの独立を願う詩や、望郷の詩を書き続け、三二年には自らの手で増補改訂版『詩集』を上梓。三九年に結核のため、三六歳の若さでこの世を去ったが、現在ではアンドレス・ベリヨ、ホセ・ホアキン・オルメドと並び、独立期の三大詩人の一人として、高く評価されている。

### 三 影響検討

それでは『廃墟』が「チョルーラ」に与えた影響とは、どのようなものなのだろうか。本節では具体的にテキストを引用しながら、比較検討を行ってゆく。まずは『廃墟』第一章末の文章を、少し長いが引用しておこう<sup>4</sup>。

"Chaque jour je sortois pour visiter quelqu'un des monumens qui couvrent la plaine; et un soir que, l'esprit occupé de réflexions, je m'étois avancé jusqu'à la *vallée des sépulcres*, je montai sur les hauteurs qui la bordent, et d'où l'œil domine à-la-fois l'ensemble des ruines et l'immensité du désert. - Le soleil venoit de se coucher; un bandeau rougeâtre marquoit encore sa trace à l'horizon lointain des monts de la Syrie: la pleine-lune à l'orient s'élevoit sur un fond bleuâtre, aux planes rives de l'Euphrate; le ciel étoit pur, l'air calme et serein; l'éclat mourant du jour tempéroit l'horreur des ténèbres; la fraîcheur naissante de la nuit calmoit les feux de la terre embrâsée; les pâtres avoient retiré leurs chameaux; l'œil n'apercevoit plus aucun mouvement sur la plaine monotone et grisâtre; un vaste silence régnoit sur le désert; seulement à de longs intervalles l'on entendoit les lugubres cris de quelques oiseaux de nuit et de quelques *chacals*... L'ombre croissoit, et déjà dans le crépuscule mes regards ne distinguoient plus que les fantômes blanchâtres des colonnes et des murs... Ces lieux solitaires, cette soirée paisible, cette scène majestueuse, imprimèrent à mon esprit un recueillement religieux. L'aspect d'une grande cité déserte, la mémoire des temps passés, la comparaison de l'état présent, tout éleva mon cœur à de hautes pensées. Je m'assis sur le tronc d'une colonne; et là, le coude appuyé sur le genou, la tête soutenue sur la main, tantôt portant mes regards sur le désert, tantôt les fixant

---

<sup>4</sup> 以下『廃墟』の引用は、全て Constantin-François Volney, *Œuvres: Tomo premier*. Paris: Fayard, 1989. によるものであり、煩雑さを避けるため、本文中では同書の該当ページ数のみを記すこととする。なお、日本語訳は全て引用者による。

sur les ruines, je m'abandonnai à une rêverie profonde."(172-173)

毎日私は平野一面に広がる遺構の何れかを訪れに出かけた。物思いに耽っていたある晩、私はちょうど「墓所の谷」まで足を進めて、ここを取り囲み、そこから目が同時に廃墟と荒野の広大さの総体を見下ろせる丘へと登った。――太陽は沈んだばかりだった。赤みがあった帯が、遙か地平線のシリアの山々に、未だその跡を残していた。東方に満月が、ユーフラテスの平らな岸の上、青みがかった空を背景に昇った。空は澄み、大気は穏かで静かだった。日の名残りの輝きが闇の怖ろしさを和らげていた。生まれつつある夜の涼気が熱せられた大地の火照りを冷ましていた。牧者は駱駝の群れを連れ帰ってしまった。目はもはや単調で灰色がかった平野の上に、如何なる動きも認めなかった。広大な沈黙が荒野を支配した。ただ長い間隔を置いて、何らかの夜鳥かジャッカルの陰気な叫び声が聞こえた…影は増し、既に薄暮の中に私の視線は、円柱と壁の白みがかった幻影しか認めなかった…この孤独な場所、この穏やかな宵、この壮大な情景は、私の心に宗教的な内省を刻み込んだ。巨大な人氣のない町の景観、過ぎ去りし時の記憶、現代との比較、全てが私の心を高尚な思索へと高めた。私は一本の円柱の柱身に腰掛けた。そうして、肘を膝につき、頭を手で支え、ある時は視線を荒野に向けつつ、ある時はそれを廃墟に据えつつ、私は深い物思いに身を委ねたのだった。

「 Cholera」の冒頭五連は、日没に伴う風景の変化を、時間を追いながらヴィヴィッドに描きだしたものとして、特に評価の高い部分である<sup>5</sup>。そして同時に、「廃墟」の影響もまた、如実にうかがわせる部分でもある。ここでは『廃墟』と文章的に重なる部分を取り上げて、比較しよう<sup>6</sup>。第一連はメキシコの自然環境を総覧として提示するが、ここにはヴォルネーの影響が窺われないので、割愛する。

さて、第二連は以下のように幕を開ける。

---

<sup>5</sup> Raimundo Lazo, "Heredia, el gran poeta cubano de la naturaleza y de la patria" en *José María Heredia, Poesías completas*. México D. F.: Editorial Porrúa 1985, pp. XXVI-XXVIII. 参照。

<sup>6</sup> 以下「 Cholera 神殿にて」の引用は、全て José María Heredia, *Poesías completas*. México D. F.: Editorial Porrúa, 1985(2<sup>a</sup> ed.)によるものであり、煩雑さを避けるため、本文中では同書のページ数のみを記すこととする。なお、日本語訳は全て引用者による。

"Era la tarde; su ligera brisa / las alas en silencio ya plegaba / y entre la hierba y árboles dormía / mientras el ancho sol su disco hundía / detras[sic.] de Iztaccihual. La nieve eterna, / cual disuelta en mar de oro, semejaba / temblar en torno de él; un arco inmenso / que del empíreo en el cenit finaba, / como espléndido pórtico del cielo, / de luz vestido y centellante gloria, / de sus últimos rayos recibía / los colores riquísimos. Su brillo / desfalleciendo fue; la blanca luna / y de Venus la estrella solitaria / en el cielo desierto se veían."(15)

暮れ方であった。かろき微風は翼をはや沈黙のうちに折り、草々と木々の間に眠っていた。その一方大きな太陽はその円盤を、イシュタクシウアル山の向こうに沈めていった。万年雪は、黄金の海に溶け込んだかのようで、山の周りで震えるかに見えた。天空の頂点に薄れゆく巨大なアーチは、輝ける空の柱廊の如く、光と煌めく栄光に身を包み、太陽の最期の輝きから、豊か極まらない色彩を受けていた。その輝きは薄れていった。白い月と孤独なウエヌスの星が、広漠たる空に見えた。

暮れ方の情景、そこでは沈黙が支配していて、やがて太陽が沈む。ヴォルネーの描写は、太陽が沈んだところから始まり、残照がシリアの山々を照らしている姿をとらえ、そこに月が昇る。エレディアにおいては、太陽が沈んでゆく経過にしたがって、イシュタクシウアル山や天空を照らす光の変化が、ヴィヴィッドにとらえられた後、月と金星が姿を見せる。

「 Cholulra 」では続く第三連で、『 廃墟 』とは順序を入れ替え、初めて語り手が登場する。

"Hallábame sentado en la famosa / Cholulteca pirámide. Tendido / el llano inmenso que ante mí yacía, / los ojos a espaciarse convidaba. / ¡Qué silencio! ¡Qué paz! ¡Oh! ¿Quién diría / que en estos bellos campos reina alzada / la bárbara opresión, y que esta tierra / brota mieses tan ricas, abonada / con sangre de hombres, en que fue inundada / por la superstición y por la guerra...?"(15)

私は有名な、 Cholulra のピラミッドに腰を下ろしていた。私の前には広大な平原が横たわり、視線を遙か彷徨わせるよう誘っていた。何という静寂！何という平和！ おお！ この美しき野に野蛮な抑圧体制が居丈高に君臨し、

この地がかくも豊かな実りを生むのは、迷信と戦乱故に、大地を覆うほど流された人間の血によって肥やされたからだなどと、思いも及ばぬことであろうに。

『廢墟』においては、語り手が廢墟を訪れ、それを一望できる丘へと登る。しかしこの丘が廢墟とは別物でないことは、引用部分の最後で、語り手が円柱に腰を下ろして思索に耽っていることから分かる。廢墟を眺める特権的な場所は、同時に廢墟の一部でもある。また語り手が眺めているのは、廢墟だけでなく、それを取り巻くオリエントの風景全体でもある。一方「 Cholera 」の語り手は、先住民遺跡であるピラミッド自体の上に腰を据え、そこから辺りを見晴らかしている。興味深いことに、この詩を通して、ピラミッド自体の描写は行われない。見られているのは遺跡を取り巻く風景なのだが、そこから引き出される連想は、引用部分でも分かるように、そこでかつて栄えた文明である。

ヴォルネーのテキストでは、「東方に満月が、ユーフラテスの平らな岸の上、青みがあった空を背景に昇った。」と、既に姿を消していた太陽に比べて、月の方が動きを伴い、東方の、エキゾチックな名称の場所に姿を現す。先に比較した「 Cholera 」第二連の該当箇所では、太陽の輝きが失せると共に、「白い月と孤独なウェヌスの星が、広漠たる空に見えた」と、比較的単純に星が見出される。この描写があっさりし過ぎていたためか、第四連では再び月と星が描かれる。

"Iztaccihual purísimo volvía / del argentado rayo de la luna / el plácido fulgor, y en el oriente, / bien como puntos de oro centelleaban / mil estrellas y mil..."(15)

純白極まりないイシュタクシウアル山は、月の銀色の影の快き輝きを返し、東方には、金の点の如く、千また千の星々が煌めいていた…

エキゾチックな名称の場所、月、そして「東方＝オリエント」への言及。もちろんヴォルネーにおけるこの「東方＝オリエント l'orient」は、パルミールの遺跡があるオリエント（中近東）を意識させながらも、月が昇ってくる方位として、ごく当たり前のものでもある。しかしエレディアの「東方＝オリエント el oriente」への言及は、ヴォルネーのテキストを前提としなければ、巧く解



積できない。なぜならここでは、既に第二節で太陽が沈みきっている以上、東西を問わず煌めいていておかしくない「星々」が、特別「東方」で輝いているとされているからだ。

そして第五連では、以下の描写が行われる。

"Al paso que la luna declinaba, / y al ocaso fulgente descendía, / con lentitud la sombra se extendía / del Popocatepetl, y semejaba / fantasma colosal."(15)

月が傾き、輝きつつ西方に下ってゆくにつれて、ゆっくりとポポカテペトル山の影は広がり、巨大な幻影の如くなっていった。

ヴォルネーにおいては、日没につれて影(L'ombre)が増し、辺りが暗くなる。その結果白みがかかった幻影(les fantômes blanchâtres)のように浮かび上がるのは、廃墟の円柱と壁である。一方「チョルーラ」においては、なぜかさらにスピードを速めて、月までもがその向こうに沈むにつれて、山の影(la sombra)が大きくなり、それ自体が幻影(fantasma)のようになってゆく。既に述べたように、『廃墟』第三章では、主人公の前に今度は個別の存在として白みがかかった幻影(le fantôme blanchâtre)(181)が登場し、語りかけてくる。この幻影は廃墟の円柱や壁そのものではないが、先に述べた第一章の描写を前提としていることを思えば、廃墟が擬人化されたものと取ることができる。一方「チョルーラ」では、幻影に準えられた山そのものに対して、主人公が問いかける。

"¡Gigante del Anáhuac! ¿Cómo el vuelo / de las edades rápidas no imprime / alguna huella en tu nevada frente? / Corre el tiempo veloz, arrebatando / años y siglos (...) / (...) / (...) Pueblos y reyes / viste hervir a tus pies, que combatían / cual ora combatimos (...) / (...) / Fueron: de ellos no resta ni memoria."(15)

巨大なるアナウァク山よ！ 速き世々の経過が、そなたの雪置きし額に何らの後も残さぬのは、如何なることか？ 時は素速く、年と世紀を奪いつつ走る（後略）。そなたが足下に沸き立つを見し人々と王達は、我らが今戦うが如く戦っていた（後略）。彼らは去り、その思い出すらも残らない。

殊更に戦争についての言及が為されるのは、メキシコ独立をめぐる戦闘を意

識してのものである。一方ヴォルネーでは、『廃墟』第二章において、文明の華やきは戦争よりも、市民の活発な活動によって想起される。

"Ici, me dis-je, ici fleurit jadis une ville opulente: ici fut le siège d'un empire puissant. Oui! ces lieux maintenant si déserts, jadis une multitude vivante animoit leur enceinte; une foule active circuloit dans ces routes aujourd'hui solitaires."(175)

ここで、と私は思った、ここでかつては豊かな町が栄えたのだ。ここが強大な帝国の中心だったのだ。そうだ！この地は現在は人気がないが、かつては賑やかな多くの人々が、その内部を活気づけていたのだ。活動的な群衆が、今日では人のいない街路を往き来していたのだ。

どちらにおいても、今は人気のない平原において、かつて存在していた文明が空しく姿を消していることが、往事の想起と現在との対照によって示される。ヴォルネーは続けて、現状を骸骨に準える。

"Et maintenant voilà ce qui subsiste de cette ville puissante, un lugubre squelette! voilà ce qui reste d'une vaste domination, un souvenir obscur et vain!"(175)

そして今は御覧の通り、この強大な都市の名残といえば、陰鬱な骸骨だ！  
広大な支配の名残を見れば、臍で虚しい記憶のみだ！

一方エレディアは第七連において、これを死体に準える。

"Todo perece / por ley universal. Aun este mundo / tan bello y tan brillante que habitamos, / es el cadáver pálido y deforme / de otro mundo que fue... / En tal contemplación embebecido / sorprendióme el sopor. Un largo sueño / de glorias engolfadas y perdidas / en la profunda noche de los tiempos, / descendió sobre mí. La agreste pompa / de los reyes aztecas deplegóse / a mis ojos atónitos."(15-16)

万物は普遍の法則に従い死に絶える。我らの住まうかくも美しくかくも輝

かしきこの世界さえも、かつてあった別の世界の蒼冷め形崩れた死骸なのだ…かくの如き瞑想に没頭していた私を、眠気が襲った。時間の深き夜に没し喪われし栄光の長き夢が、私の上に降りてきた。アステカ王達の鄙びた栄華が、呆然とする我が眼前に展開した。

エレディアが描く夜は、過去の文明がそこに埋もれている、歴史の闇である。上がったばかりの月までもが山陰に沈められるのは、これが夜景の現実的な描写ではなく、「時間の深き夜」の、メタフォリカルな導入だからである。そして彼が想起するのは、決して華やかな活動ではない。既に言及のあった戦争や、人身犠牲といった、理性の光を欠いた歴史の夜に相応しい、血生臭い過去である。これに対してヴォルネーもまた、かつてオリエントに生きた人々を想起する。

"Et l'histoire des temps passés se retraçait vivement à ma pensée; je me rappelais ces siècles anciens (...); je me peignis l'Assyrien sur les rives du Tigre, le Kaldéen sur celles de l'Euphrate, le Perse régnant de l'Indus à la Méditerranée."(176)

そして過ぎ去りし時代の歴史が、私の思いに生き生きと蘇ってきた。私はこれらの古き世紀を想起した。(中略) 私はティグリスの岸辺にアッシリア人を、ユーフラテスの岸辺にカルデア人を、ペルシャがインドから地中海までを支配する様を思い描いた。

ヴォルネーにおいては、第二章の語り手による想像は、第三章における幻影の解説の前振りに過ぎず、重点は往事の栄華を現在の荒廃と対照させることに置かれている。そのため語り手は、かつての文明の華やぎこそを、より強く想起する。ただし第二章半ばでは、東方の古代帝国が栄えていたときは、聖書に基づくユダヤ＝キリスト＝イスラム信仰ではなく、人身犠牲や異教信仰が行われていたことが述べられており、エレディアのネガティブな歴史想起が、決してヴォルネーとは無縁のものではないことが分かる。

全ての想起が終わり、現実に立ち返ったエレディアの語り手は、最終第九連で再び今ここにある遺跡に、「今お前は黙し人気もない、ピラミッドよ。Muda y desierta / ahora te ves, pirámide.」(16)と語りかける。この言葉が、最初に引

用した『廃墟』第一章の、沈黙に支配された孤独な廃墟の情景を改めて意識していることは、間違いない。そしてヴォルネーが、理性に則った支配が、文明の変遷という波を乗り越え、永続的なものとなることを主張して『廃墟』を閉じるのに対し、エレディアは迷信と激情のもたらず流血が、孫の代には教訓となって役立つことを期待して、詩を終える。三二年版で大きく加筆修正が施されたこの末尾で、単純な「現代」ではなく、さらに先の時代に期待が託されているところに、一八二〇年代から本格的にエレディアを巻き込むことになった政治動乱が、その後も収まることなく続いていることに対する、エレディアの絶望を窺うことができよう。

#### 四 まとめ

以上詳細に検討してきたように、「チョルルーラ神殿にて」が『廃墟』の影響下にあることは、明らかである。最初に述べたように、カリーリャはヴォルネーとエレディアの影響関係に言及しているが、詳しく論じているわけではない。ヴォルネーの影響が明確に特定されなかった結果、「チョルルーラ」を他の作家・作品との影響関係において論ずる際に、無用な混乱がしばしば生じている。

例えばマヌエル・ペドロ・ゴンサーレスは、エレディアの特長である激しい感情吐露が「チョルルーラ」に欠けており、一方で思索的精神、穏やかで哲学的な歴史想起といった、エレディアらしからぬ要素が多く含まれていることに注目し、その源泉を同時代アメリカ合衆国の詩人で、スペイン語圏の文化にも通じていた、ウィリアム・カレン・ブライアントの「日暮れの散策 A Walk at Sunset」（一八二一）に求めている。しかしゴンサーレス自身認めるように、「チョルルーラ」執筆当時エレディアは英語が不得手であり、ブライアントを知っていた形跡もない。一方ゴンサーレスがブライアントの影響に帰している特長は、全てヴォルネーの『廃墟』に当てはまるものであり、エレディアがこちらから影響を受けたと解釈するのが、より自然であろう<sup>7</sup>。

一方マリー・ルイズ・プラットは、「チョルルーラ」の描写をアレクサンダー・フォン・フンボルトに由来するものとした上で、この作品で展開される歴史的的政治的思索を、フンボルトにはない「極めてクリオーリョ的な *criollísimo*」もの

---

<sup>7</sup> Manuel Pedro González, *José María Heredia, primogénito del romanticismo hispano. Ensayo de rectificación histórica*. México D. F.: El Colegio de México, 1955, pp. 92-99, 101-102. 参照。

であるとしているが、これは彼女がこの思索と『廃墟』の関係を見落としたためである<sup>8</sup>。またエンリケ・アンデルソン＝インベルは、エレディアの自然や廃墟への関心をもって、彼のロマン主義的傾向の徴としている<sup>9</sup>。しかしヴォルネーにも顕著に見られるように、自然と廃墟への関心は、既に一八世紀ヨーロッパにおいて一般的なものであった<sup>10</sup>。

以上の各論を見ても、エレディアとヴォルネーの関係に焦点を置くことで、エレディア作品読解がより広がってゆくことは、明らかだろう。ここではさらにもう一点、オリエントを眺めるヨーロッパ人ヴォルネーの姿勢を、エレディアが先住民の歴史を強く意識させるメキシコにおいて再現しているところに注目して、論を結びたい。

エレディアは、先住民文明の栄枯盛衰が、「我々の孫たちに A nuestros nietos últimos」(16)教訓となることを望んでこの詩を結んでいるが、ここで彼が念頭に置いているのは、直接的には先に述べたように、メキシコ、キューバ、あるいはイスパノアメリカ人の将来であろうが、そこに限定するべき表現はなく、最終的には人類全般の未来が意識されていると言える。この作品においては、先住民の歴史は、イスパノアメリカの現在との連続性を保ち、これに「歴史」を与えるものではなく、あくまで人類全体として省みたときに教訓をもたらす、様々な「古代文明」の一つなのであり、この点ではヴォルネーが「オリエント」の諸文明の変遷をめぐって考察を繰り広げ、ヨーロッパ文明の将来についての他山の石としようとするのと、変わりはない。

エレディアは「 Cholula 神殿にて」で、見事なメキシコの自然描写を行っているが、ここではメキシコを異郷として眺めるスタンスがとられている。一八二〇年の時点で、メキシコがエレディアにとって「外国」であったとはいえないのは、第二節で述べた通りである。しかしこの作品においては、エレディアはオリエンタリズムを積極的に利用し、見られる対象としての「メキシコ」や「インディオ」を、キューバ出身のクリオーリョである自分から切り離すことによって、「メキシコ」を「見る」視座を獲得し、この視覚的な自然描

---

<sup>8</sup> Mary Luise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London, New York: Routledge, 1992, pp. 182-183. 参照。

<sup>9</sup> Enrique Anderson Imbert, *Historia de la literatura hispanoamericana: I. La colonia. Cien años de república*. México D. F.: Fondo de Cultura Económica, 1970(2<sup>a</sup> ed. revisada y aumentada), p. 229. 参照。

<sup>10</sup> ジャン・スタロビンスキー『自由の創出——十八世紀の芸術と思想』小西嘉幸訳、白水社、1982。一七一一—一七八頁 参照。

写を可能としたのである。そこにはエレディアに近い、クリオーリョの「メキシコ人」も登場しない。先住民文明は距離をもって扱われ、詩の中にちらりと現れる先住民も、点景人物の域を出ない。

エレディアの先住民文明に対する姿勢に変化が見られるのは、一八二二年の「アナウアクの住民への頌歌」からである。この作品では、スペイン人によるメキシコ先住民征服への批判が、現在のメキシコにおけるスペインからの独立運動を鼓舞する詩連につながっている<sup>11</sup>。また一八二五年の「影 La sombra」では、詩人の前にアステカ、インカなど、スペイン人に征服された先住民王国の長たちが現れ、暴力的に課されていた支配の鎖を解き放ち、アメリカ独立を勝ち取るように訴える。「チョルーラ」において先住民文明が、去るべくして地上から消え去った野蛮なものとして、距離をおいて扱われているのとは対照的に、これらの作品では先住民史は、現在の独立運動に直結し、これを正当化する根拠を提供するものとして、占有されている。このような独立正当化のための先住民史占有は、同時期のベリョ「詩神への誘い」(一八二三)や、オルメド「フニンの勝利」(一八二五)においても行われている。

しかしこの先住民への接近は、エレディアにおいてはレトリカルなポーズの域を出ず、「影」と同じ一八二五年に書かれた「憂鬱の快樂 Placeres de la melancolía」においては、「チョルーラ」同様、先住民史は距離をおいて眺められている。以後のエレディア作品において、先住民が大きな意味を持って扱われることはない。

エレディアにとって先住民文明は、あくまでオリエンタリズムをはじめとする言説の網によって占有し支配する対象に過ぎなかった。それはヴォルネーにとってのオリエンと同様であり、その限界を確認した上で、我々は彼の詩に接しなければならないだろう。

---

<sup>11</sup> Carilla, *La literatura...*, p. 112. 参照。